

# 京都大学文学研究科図書館所蔵本「篁物語」(影印)とその“末尾有空白系統本”の古態性

安部清哉

## 論文要旨

本研究では、これまで公開されてこなかった京都大学文学研究科図書館所蔵本(略称…京都大学本)「篁物語」の影印(複写)を全文掲載する。併せて、その最末尾文(一文)の直前にあるおよそ二文字分の空白について、その諸本系統上、および、本文書承上の意味について考察する。その結果、空白のある「末尾有空白系統本」(≡水戸彰考館本甲本と同乙本、京都大学本≡「篁物語」は、空白のない「末尾無空白系統本」(≡承空本、宮内庁書陵部本≡「小野篁集」)よりも古形態を留める写本である可能性が高く、また、「有空白系統本」は、「無空白系統本」の承空本(鎌倉後期書写)よりも古い段階である鎌倉中期以前の形態を保持した写本である可能性がある、という解釈を提示する。

**キーワード** 【京都大学文学研究科図書館所蔵本、『篁物語』、「小野篁集」、彰考館本系統、承空本系統】

## プロローグ

京都大学文学研究科図書館所蔵の「篁物語」の写本には、その最末尾に、つぎのような空白がある。

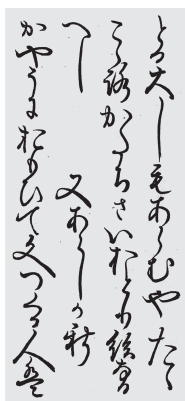


図1 京都大学本

この京都大学文学研究科図書館所蔵本「篁物語」(以後、京都大学本と略記する場合がある)におけるこの空白を報告した研究は管見の限り、これまで皆無である。また、この空白に気づいていた研究者は、後述するような研究史から見て、既に鬼籍にある故・津本

信博氏ただ一人であろうと推察される。(津本(1977))『篁物語』の本文」と津本(1977)『『篁物語』の成立をめぐる』との2つの津本氏の記述を照合すると、直接この箇所まで実見したかはともかく、津本氏は京都大学本にも空白があるとの理解に立っていたらうと推察するものである)。

さて、このおよそ2文字分ほどの空白は、この写本の書写者個人のたまたまの運筆によって偶然できたような余白ではなく、底本にあった空白を忠実に写したことによる隙間であると解釈される。そのことは、その底本のさらにひとつ前の親本、即ち、京都大学本のいわば直系の「祖父本」であるところの、水戸彰考館所蔵本「篁物語」の「甲本」と呼ばれる写本の末尾部分と照合すると明らかになる。

次に掲げるのは、その彰考館所蔵甲本の末尾部分の文字配置をなぞったものである。

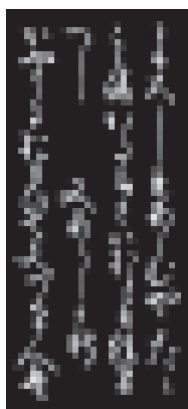


図2 甲本の文字配置 (空白があるイメージ図)

京都大学本は、甲本のコピーではないか、と見まごうほどのみごとな影写本である。それだけに甲本を直接見ながら模写した所謂臨模本かと思われるほどであるが、直接の書写本ではない。彰考館本

形本(甲本)を書写した本(京大本の親本||底本)を借りてそれを「影写」した孫本であることが、その末尾にある次の跋文によって知られる。

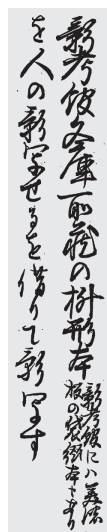


図3 京都大学本

——彰考館文庫所蔵の柎型本(〔引用者注…2行割で〕彰考館には美濃板の袋綴本もあり)を人の影写せるを借りて影写す

つまり、京都大学本は、彰考館柎形本(甲本)の直系の孫本であることがわかる。右のような臨模的影写状態からみて、この二つの写本——甲本と京都大学本——の中間にあたる「京都大学本の親本」(仮称「彰考館文庫柎形本影写本」)も、さぞやなお一層の忠実な書写本であったことだろうと推察される。残念なことに、現在、その「彰考館文庫柎形本影写本」の所在は不明である。京都大学本共、それぞれの書写時期も未詳である、という状態である。

さて、この空白は、①なぜあるのだろうか? ②これまでの研究では、どのように考えられているのだろうか?

改めて、この空白について調査してみると、これまでの『篁物語』の本文翻刻(全文翻刻)において、この空白を明示しているものは、皆無であった。さらに、「小野篁集」として伝わっている写本である承空本、書陵部本では、この空白が存在していなかった。そして、この空白に言及し、考察している研究者は、ただ一人、先

に挙げた津本信博氏のみであった。つまり『篁物語』研究史において、ほとんど顧みられることのなかった空白であることがわかった。本稿は、京都大学本の調査を経て、より課題が浮き彫りとなった、『篁物語』における伝本上の本文の問題点について、ほぼはじめで考察を加えてみようとするものである。

なお、以下では、作品名としての総称としては二重カッコ『篁物語』で表記し、京都大学本や彰考館本などにおける写本での書名としては一重カッコでの「篁物語」と表記して区別することとする。後者に合わせるため、承空本・書陵部本における書名である「小野篁集」も一重カッコにて表記することとする。

## 1 はじめに

安部(2010)にて、『篁物語』の末尾部分に、作品が成立した後追加されたと考えられる部分(2文か1文)があるという解釈を提示した(後述)。それゆえ、その論の後、当該部分が後日の追記であることを示す他の痕跡、徴証を探すために、改めて、初心にもどって原文(写本)に戻り、諸写本を直接見直していくことを考えた。改行位置、行当たりの文字数、墨付け位置、字配り、連綿、など、活字では見えない本文の運筆に、何らかのヒントが残存していないだろうか、と、かつて書誌学、文献研究の授業などで教えていただいた基礎的作業に戻って再調査してみることとした。その一方

では、これまでの『篁物語』の研究史における後日追加部分に関する言及を改めて探りなおすこととした。

写本をどうせ見直すなら、見慣れている公開されているものではなく、未見でありかつ未公表の京都大学本が良いだろうと考えた。その「篁物語」及び「小野篁集」の複写を取り寄せ、まずその「篁物語」の方を彰考館甲本と対照させながら点検を進めてみた。すると、その末尾部分に「二文字」分の空白があることに気づいた。早速、その空白を彰考館甲本と同乙本でも確認してみると、どちらにも存在している空白であることを改めて認めることとなった。

それでは、この空白は、従来の翻刻ではどのように扱われているのだろうか。すべて点検してみると、不思議なことに、これまでの本文翻刻(全文翻刻)のどれひとつにも、その空白は再現されておらず、その空白に関する記載はなく、翻刻の注記や校異にもそのことへの言及は皆無であった。さらに興味深いことに、「小野篁集」という名で書承されてきている承空本と書陵部本には、その空白は存在していなかったのである。

「篁物語」という名称で伝来している写本にだけ残っている、この見落とされてきた末尾部分の空白は、何を意味するのだろうか？」

それが、本稿の出発点である。

## 2 京都大学文学研究科図書館所蔵本「篁物語」

本研究では、これまで公開されてこなかった京都大学文学研究科図書館所蔵本（略称：京都大学本）「篁物語」の影印（複写）を、所蔵者の御許可のもとに【付記1】全文掲載する（後掲、【資料篇1】）。併せて、その最末尾文（一文）の直前におよそ二文字分の空白について、その諸本系統上、および、本文書承上の意味について考察を試みる。

京都大学本は、水戸彰考館本甲本と比較すると、その本文の行数・文字数のみならず、その変体仮名字母表記や仮名文字遣い、さらには筆書きのその書体に至るまで、きわめて忠実に甲本の姿を引き継いでいる写本であることが確認できる。いわゆる臨模した写本、直接の臨模本であろうか、と思われるほどに、字体・書体（くずし）・連綿、字配り、行間など、すべてにおいてきわめて忠実である。「臨模本」とはかくや、と見入る出来映えである。

ただし、時にごく一部の行間に、明らかな細い（筆書きらしい）別筆にて、他本との異同あるいは誤写と思われる箇所への疑問点をメモしたような手書きの加筆が見られる。それは、例えば、次のような箇所である。筆跡からも明確に別人による加筆と考えられるので、それらはここでの考察から除外しておく。

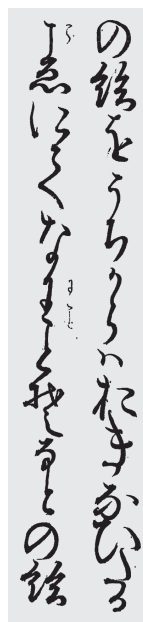


図4 京都大学本



図5 京都大学本

さて、この京都大学本について取り上げ、考察を加えた研究は、管見の限り、津本信博（1997）『『篁物語』の本文』のみと思われる。それに拠れば、次のように報告されている。

○「表紙左上方の題簽、内題ともに『篁物語』とあり、蔵書印なども同蔵の「小野篁集」と同じである。奥書に

彰考館文庫所蔵の榎型本〔引用者注…2行割で〕彰考館には美濃板の袋綴本（マヤ安部）とあり、  
りて影写す

とあり、本書も彰本の忠実な写本である。何れも書写年時は記入されていないが、比較的新しい伝本である。（津本信博（1997）『『篁物語』の本文』より。傍線は引用者、以下傍線は同じ、「彰本」は彰考館本の意。右の翻字部分で「く袋綴本とあり」とあるが、「くもあり」であろうと思われる【図6参照】。）

津本氏は、「彰本」即ち「彰考館本」の「忠実な写本」と判読されてきたことがわかる(上述の別筆の書き込みには触れられていない)。

右の引用にある京都大学本の引用部分は次の通りである。

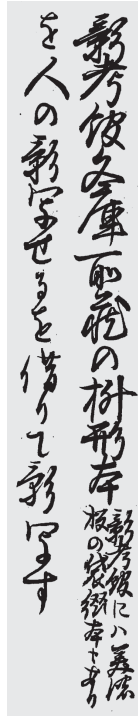


図6 京都大学本の奥書部分

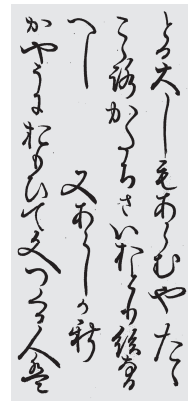
——「彰考館文庫所蔵の梶型本《引用者注…2行割で》彰考館には美濃板の袋綴本もあり》を人の影写せるを借りて影写す」

その記載によれば、直接書写した臨模本ではなく、梶型本を他の人が一度書写していたものを見ながら書写した、いわば孫本であることがわかる。京都大学本の底本にあたる「梶型本影写本」も、京都大学本の姿から推察するに、さぞかし忠実な影写であったものだろうと思われるのであるが、その所在は現在未詳である。【補注】

### 3 彰考館本甲本・同乙本における末尾空白と、承空本および宮内庁書陵部本の末尾

京都大学本の最末尾文(一文)の直前には、先に図1に挙げたよ

うに次のおよそ二文字分の空白がある。



(図1) 京都大学本…再掲載

彰考館本甲本にも、同じ位置に同じ程度の二文字分の空白が、次のようにある。

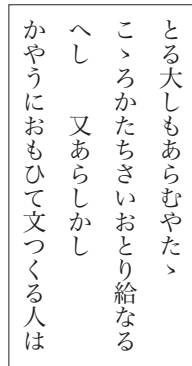


図7 彰考館本甲本 本文  
【資料篇1】(3)——1——②参照

彰考館本(乙本) 墓物語(乙)

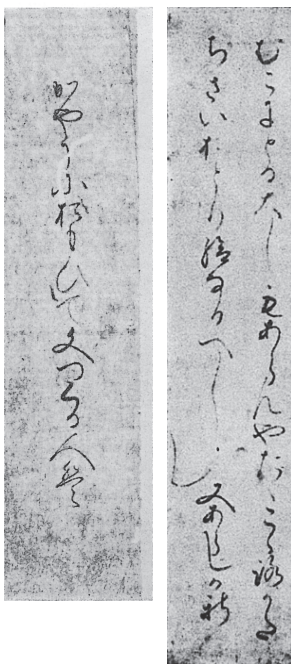


図8 彰考館本 乙本(今井卓爾氏撮影、『墓物語新講』武蔵野書院) また、甲本の写本かとされる(◆注(一)) 彰考館本の乙本に

も同様の空白があることが確認できる(図8参照、【資料篇2】参照)。

即ち、これらから言えることは、彰考館本の甲本・乙本にある空白は、運筆上のたまたまの隙間というようなものではなく、彰考館文庫榭形本影写本の書写者も削除せず意味ある空白と解釈して忠実に影写し、また、それを見た京都大学の書写者も削除せず意味あるものとして臨模して残し、書承されてきた明瞭な空白であったということがわかる。

ムコニトル大臣モアランヤタ、心タカ  
 キサイヲトリタマフナルヘシマタア  
 ミシカシカヤウニオモヒテフミツクルヒ  
 トハ

図9 承空本「小野篁集」(時雨亭叢書) 翻字

あらむやた、心たかきさいを  
 とりたまふなるへしまたあらし  
 かしかやうにおもひてふみつ  
 くるひとは

図10 宮内庁書陵部本「小野篁集」(平林他(二〇〇二)、和泉書院) 翻字

では、もう一方の写本である承空本、および、その写本ではないかともされる宮内庁書陵部本では、この末尾はどのようになってい

るだろうか。確認してみると、この二写本には、図9・図10に示すようにこの空白が見られないことがわかる。

近時最も新しく公開され、書写時期が明らかで現在もつとも古いと見られている写本である承空本(「小野篁集」)にこの空白がないという点は注目される。

さて、このように確認してみると、空白の有無という観点において二種の写本があることがわかる。空白をもつ系統の写本として、仮称「末尾有空白系統本」(≡水戸彰考館本甲本と同乙本、京都大学本)、そして、空白を持たない系統の写本として仮称「末尾無空白系統本」(≡承空本、宮内庁書陵部本)という二種の写本系統である。

#### 4 二つの系統と「篁物語」および「小野篁集」という二つの書名

さて、3で確認した空白の有無と諸写本とを、改めて書名との関係から見直してみると、「有空白系統本」の書名はすべて「篁物語」とあり、「無空白系統本」のそれはすべて「小野篁集」とあることがわかる。そのことからみて、これら二種類の書名は、空白の有無で相違する本文の違いと、どうも連動して伝承されてきたものなのではないか、と推定される。

これまで『篁物語』は、写本が少ない故に諸本系統の分類論は存

在していなかった。しかし、『篁物語』の諸本系統には、「末尾有空白系統本」である書名「篁物語」系統と、「末尾無空白系統本」である書名「小野篁集」系統という二系統が立てられることになる。ここに新たに諸本の分類論を提唱してみることにしたい(諸本についての整理は後で再述する)。

## 5 従来のすべての研究での、本文全文翻刻における末尾空白の見落とし

さて、ではこの空白は、これまでの本文の翻刻研究ではどのように扱われていたのだろうか。

改めて主要翻刻を確認してみると、従来の『篁物語』研究史上において、いずれの本文翻刻(全文翻刻)にあつても、この空白を正確に報告あるいは再現した活字本文がひとつもないことをここに報告する。つまり、ほとんど看過されてきた空白だということになる。

それは、空白のある書陵部本(甲本・乙本)の本文翻刻の場合のみならず、空白がもともとなし承空本・書陵部本の全文翻刻にあつても、他本との校異を示すにおいて書陵部本との異同を指摘する場合を含めても、皆無なのである。校異を挙げる時に、「彰考館本ではここに2文字相当分の空白がある」との指摘も可能であるはずだが、それも管見の限り皆無であった(承空本を翻刻した際に諸本との校異を示した安部(2009.3)においても見落している)。

ただし、空白に気づき問題として取り上げている唯一の研究者として、津本信博(1977)がある。また、部分翻訳においてであるが、陣野英則(2017)はこの空白を指摘している。また、やや不正確なかたちながら平林文雄・財団法人水府明德会編(2001)は、対校本形式にて書陵部本にも空白があるように示しつつ甲本・乙本の空白を示しており、少なくとも空白には気づいていたことがわかる。これら三名の先達が、先行研究としてこの空白に気づいていたものと思われる(次節以降に紹介していく)。

## 6 空白のもつ問題の指摘——津本信博(1977)

この空白が存在することを、おそらく初めて取り上げ、問題として考察を加えた研究には、管見の限りで唯一、津本信博(1977)がある。津本氏は、次のように、成立過程が二段階である可能性にも触れ、問題提起している。

○「その影写本は約二字分の余白が存在するのである。ここは書写の事情から言つて当然連続してよい筈のところであるが、何故に余白が設けられたのか。因みに書陵部本はこの箇所に余白はない。果たして彰考館本のは現本を忠実に模写していることの証しなのか、この余白はいろいろな問題を提示してくれるように思われる。原作者以外に篁フアン<sup>「マヤ」</sup>や書写者などが勝手に増補したのか、あるいは、篁物語の成立を少なくとも二段階に分

けて考えるべきか、大変興味を呼ぶ余白である。多分に篁物語には、不純な本文が原作に介入していると考えられるだけの余地は充分残されていると言わねばなるまい。」(津本信博(1977)) 『篁物語』の成立をめぐる<sup>2)</sup>より、傍線は引用者、以下同じ)

このような解釈が既に40年以上前になされているが、この指摘を取り上げた研究もまた皆無である。「篁物語の成立を少なくとも二段階に分けて考えるべきか」というその解釈は、次節のように、安部(2018)の解釈に関連してくる。

## 7 空白後の一文の解釈に関わる研究——安部清哉(2019)

前述の津本(1977)の指摘とは別に、この空白の後の最後の一文について、空白の有無とは無関係の視点からその本文成立上の解釈を加えた研究に、安部清哉(2018)がある。それは、その一文がそれより前の本文部分の成立よりも後(後日、後人、後代など、また、同一人物によるか別人かも未詳)の別段階に挿入された可能性がある、とする解釈である。

安部(2018)における当該部分を、以下に引用しておくことにするが(全文は【◆注(2)】参照)、安部は、最後の二文か一文が後日加筆の可能性があり、特に最後の一文がもつとも蓋然性が高い部分としている。

○「さらに、『伊勢』の「今・昔対比」末尾のうち「昔の若人」に対応するのが『篁』の【昔の大臣】たゞ心・かたち・才を取り給ふなるべし。」であったと見た場合には、そこまでが『伊勢』との対応範囲ということになり、残るのは最後の一文のみとなる。(安部(2018))

追加部分と空白との間には、その追加の一文が原作とは別部分であるという挿入者自身の意識が投影して、文字間に二文字ほどの空白を置いた、という解釈が成り立つであろう。

根本氏が「篁物語の成立を少なくとも二段階に分けて考えるべきか」とされた空白の解釈は、末尾一文の後日加筆説を挙げた安部(2019)と、奇しくも一致する。両解釈を合わせると、空白のあとの最末尾の一文は後日の加筆である蓋然性がより高まったと言えるか。

さて、このように「空白以下は後の挿入」という解釈に仮に立つた場合、二つの諸本系統に立ち返って考えてみると、挿入時点の名残を留める「末尾有空白系統本」の方は、後人には意味が分からなくなつた空白を失っている状態の「末尾無空白系統本」よりも、より原文に近い古い形態を残している本文である、という次のような解釈が成り立つことになる。



8 「末尾有空白系統本」(Ⅱ水戸彰考館本、京都大学本)  
の「篁物語」、および、「末尾無空白系統本」(Ⅱ承空  
本、宮内庁書陵部本)の「小野篁集」の新旧

改めて、空白の有無に関して、この作品の史的形成上の問題を検討してみる。

最後の一文が後日追加でかつその前の空白は追加段階での形態であつた場合、空白を失つた状態は、空白の意味がわからなくなつた後代の書写過程において、削除されてしまつた形式であると推察される。とすると、最後の一文の前にこの空白がある本文形態は、その空白を失つた本文形態よりも、より古い段階を留めている状態という解釈が成り立つだろう。もしそのように考えてよいのであれば、「末尾有空白系統本」(Ⅱ水戸彰考館本甲本と同乙本、京都大学本Ⅱ「篁物語」)は、「末尾無空白系統本」(Ⅱ承空本、宮内庁書陵部本Ⅱ「小野篁集」)よりも、古形態を留める写本本文である蓋然性が高い、という推論が成り立つことになる。

これら諸書写本類の形態の成立時期と新旧の位置づけに関しては、近時の研究においては、承空本(「末尾無空白系統本」)が、鎌倉時代の僧・承空による書写であり、その書写時期もある程度明確であるゆえに、現在最古の写本として重く置かれるようになりつつあつた。

しかし、ここで、「有空白系統本」の方がより古形態であるとする、鎌倉後期の承空の書写段階にて既に空白を失っている承空本の形態以前の段階での形態、即ち、それ以前、承空本登場以前である「鎌倉中期以前の形態(末尾空白)」を留めているのが、「末尾有空白系統本」であると推論されることになる。

この解釈は、時雨亭叢書刊行によつて初公開された当時、書写年代<sup>4</sup>上、最古の写本であることもあつて、より古形態として重要視されるようになっていた承空本と、それ以外の諸写本との優劣関係を改めて再度検討することを求めるものとならう。即ち、承空本の相対的位置も再検討する必要があると考える。

9 「有空白系統本」Ⅱ水戸彰考館本(甲本・乙本)の書写年代

さらにきわめて興味深いことに、前節にて「鎌倉中期以前」と位置づけてみた「有空白系統本」のこの年代推定は、その系統の一本である「水戸彰考館本甲本」の書写年代に関するかつての次の指摘とも、奇しくも一致してくることになる。

つとに提示されたその解釈は、次のような短い指摘である。

○「この原本は鎌倉中期の頃のものであろう。世に云ふ二条流の書風を示すものである。」(「校本篁物語(彰考館本甲本)」(1933)『文学』創刊号・附録、執筆者記載なし)

これだけの短い言及で、執筆者名は記載がない。根拠に関しても、

それが果たして根拠として書かれたのかも微妙であるが、書体が「二条流の書風」であることを推定根拠とするらしい。

この解釈にも一定の意義が認められるならば、「鎌倉中期」という時期は、承空本の鎌倉後期よりも一時代前であり、空白から推定した時代と一致することになる。甲本を含む「有空白系統本」は鎌倉中期（以前）の形態の蓋然性がより高くなる。

また改めて、書名について、このような本文の年代との関係からとらえなおして言い換えるならば——これらの仮説の重なりも一定の意味があるとするならば——、「有空白系統本」だけに伝わっている「篁物語」という書名の方がより古い段階での名称であつて、「無空白系統本」だけに継承されている「小野篁集」の名称は、空白のない系統の写本が出現した段階で呼び改められた名称なのかもしれない。二種類の書名には、そのような前後関係が投影している可能性も考えていく必要がある。

ところで、甲本は果たして「二条流の書風」といえるのか、「二条流の書風」であれば鎌倉中期頃という解釈が妥当なのか、という点は、改めて検証が必要である。そこで、この「世に云ふ二条流の書風」について、知人の書家である松岡千賀子氏（学習院大学非常勤講師・書道）に、水戸彰館本甲本の写本コピーをご覧いただき、ご意見をうかがってみた。曰く、「何をもつて『二条流』といっているのかこの短かい記述だけでは根拠が不明瞭である上、この筆跡だけを見て鎌倉中期と絞り込むことは難しい。」ということであつ

た。一般に「二条流」とは藤原定家の流れを継ぐ二条家の書風を指すかと推察されるが、定家の書風での筆跡（あるいはそれに類する書風）とも見えないように思われた。今後の課題としておきたい。

## 10 『篁物語』の諸本とその系統表

前節まで、諸本の系統分類、書名、本文の状態とその年代についても検討してみた。それらを踏まえて、諸本の系統・系列を、年代も含めて二系統分類案にて示せば以下のようなになる。

(1) 「末尾有空白本」系統諸本——本文末尾に二文字分空きがある本文

新解釈・鎌倉中期以前の古形態か？

その1 ①「彰考館本 甲本」（書写自体は、江戸初期書写か

〔大系本・遠藤嘉基本説 津本信博説〕

↓②（彰考館本「篁物語」甲本の個人書写本\*）所在

不明（③の底本）

↓③京都大学本「篁物語」（書写年代未詳）

その2 ⑦「彰考館本 乙本」（甲本を直接書写か（平林文雄説）、

甲乙の前後関係不明（津本信博説）

↓①（昭和7年11月書写）今井卓爾博士による「乙

本」臨模本(所在不明)

(2) 「末尾無空白本」系統諸本——末尾に空白が無い本文

承空白は鎌倉後期書写

① 承空白「小野篁集」(鎌倉後期書写)

↓②宮内庁書陵部本「小野篁集」||江戸初期(桂宮本叢書)

説)

↓③(書陵部本「小野篁集」個人書写本\*)所在不明(④の

底本)

↓④京都大学本「小野篁集」(書写年代未詳)

○後藤丹治氏の書陵部本書写本「小野篁集」(昭和2年)

○岡田希雄蔵稲原書写本「小野篁集」

\*印||京都大学の「篁物語」および「小野篁集」のそれぞれの直接の底本(狭義の直接の親本)については、各々の奥付に「人の影写せるを借りて影写す」とあるので、それぞれの直接の底本が別にあつたことがわかる。

(3) その他——所在不明本

○九条家所蔵本「篁物語」(「九条家蔵書の目録」(寛永十年正月の書写)による帝国図書館『本朝書目』に記載ありとされ、

「篁物語」の書名で引かれる)

『篁物語新講』に次のように記載される写本である。

「後藤丹治氏「篁物語新考」で紹介された一本

帝国図書館所蔵の本朝書目は九条家蔵書の目録で東都書肆小堀英平が寛永十年正月に書写したものである。その中に「篁物語一本」と見えているが、その九条家所蔵の「篁物語」は今日も不明である。」

## 11 空白を取り上げている研究者三名——津本信博、平林

文雄、陣野英則各氏——

この空白について、何らかのかたちで指摘している研究者には、津本信博、平林文雄、陣野英則の三名がある。このうち、全文翻刻ではないものの、平林氏と陣野氏の2名が、部分翻刻あるいは字母表において空白部分を示していることを特記しておく。

### 11-1 津本信博(1977)『「篁物語」の成立をめぐって』

石原昭平・根本敬三・津本信博(1977)『「篁物語」の「注解篇」での本文は、底本が書陵部本「小野篁集」であるので空白はない。また、校異に甲本・乙本との異同を示しているものの、その校異にも空白への言及はない。

一方、「研究篇」の(津本信博(1977)『「篁物語」の成立をめぐ

つて」において、本空白について、津本氏の次のような解釈が提示されている。それゆえ、空白があることは、先の著者三名に共有された情報だったものと思われる。空白に対する初めての指摘であり、また唯一の考察でもあり、注目に値しよう。

○「その影写本は約二字分の余白が存在するのである。ここは書写の事情から言つて当然連続してよい筈のところであるが、何故に余白が設けられたのか。因みに書陵部本はこの箇所余白はない。果たして彰考館本のは現本を忠実に模写していることの証しなのか、この余白はいろいろな問題を提供してくれるように思われる。原作者以外に篁フアンや書写者などが勝手に増補したのか、あるいは、篁物語の成立を少なくとも二段階に分けて考えるべきか、大変興味を呼ぶ余白である。多分に篁物語には、不純な本文が原作に介入していると考えられるだけの余地は充分残されていると言わねばなるまい。」(津本信博(1977)『『篁物語』の成立をめぐる』、傍線は本稿執筆者)

### 11—(2) 平林文雄・財団法人水府明德会編著(2001)の「三本対校本」および「字母表」での空白記載

平林文雄氏は、平林文雄・財団法人水府明德会編著(2001)『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字分析・総索引』(和泉書院)において、本文全文を翻刻掲載しているが、甲本、乙本の本文の活字翻刻部分では、空白

を再現してはいない。一方、「三本対校」と「甲本・乙本対称字母表」の方で空白を再現している(【資料篇2】参照)。

「三本対校」の記載に従えば、書陵部本「小野篁集」にも同じ空白が二文字分あることになってしまう。反対に、その中央の行にある「小野篁集」の空白は実際にはないので、ないものと見なすとそれに合せて左右に配置してある「篁物語」の甲本・乙本とも空白はないことになる。いずれにしても不正確な点が残る記載となっている。

### 11—(3) 陣野英則(2017)による部分翻刻と校異

陣野英則(2017)『『篁物語』の構成と言葉』(『国文学研究』183)では、解釈のために、本文が部分的に翻刻されている。その「三」節での注釈のために、所謂第II部後半(陣野氏の論では第三段)が翻刻され、その本文部分では底本に忠実に2文字の空白を開けて翻刻している。彰考館本と承空本との校異にも空白の有無が次のように記載されている。

○【本文翻刻部分】「才さいをとり給ふなるべし。 又またあらかし、  
かやうに思ひて文つくる人は。(二五オ(二六ウ))」  
○\* (「又」の前の空白) —アリ〈彰〉—ナシ〈承〉 【引用者注:「承」は「承空本」の略】

これまでの諸研究中、もつとも正確な本文翻刻(部分)と校異で

ある。

以上が、管見の限りでの、この空白に関する先行研究での言及である。

## 12 彰考館本乙本「篁物語」の写真の所在不明(『篁物語

### 新講』口絵掲載の写真)

空白のある写本のひとつである彰考館本「乙本」の写真(一部)について、探索結果を報告しておく。

「乙本」の原本は戦災で焼失し、消失前に、宮田和一郎氏が忠実に模写したとされる写本1本(平林文雄(2001))が、乙本の姿を伝える資料として、これまで影印・翻刻・索引の底本として使用されてきている。

一方、今井卓爾博士が、特別に許可を受けて写真撮影し書写した1本が、津本信博氏に貸与され、『篁物語新講』の口絵写真として掲載され、また、その校異と考察にも利用されている。そこでの写真6葉(6か所)が、現在唯一残されている乙本の原文の確実な姿を確認できる資料である。そこには、幸運なことに偶然にも末尾部分が含まれていた。乙本の末尾部分にある空白の状態が書写ではなく、写真で明瞭に確認することができる。本稿の資料篇に掲載したように、甲本と同じく、2文字分の空白が認められる(画像は『篁

物語新講』で2頁にわたるため、画像が2葉に分かれている)。

写真にて空白を確認できる貴重な資料であるので、その『篁物語新講』の写真原稿の所在を追ってみた。問い合わせたのは、○武蔵野書院、○『篁物語新講』の著者三名の一人・根本敬三氏、○早稲田大学図書館(写真撮影者の今井卓爾氏の蔵書の寄贈を受け「今井卓爾文庫目録」(早稲田大学図書館文庫目録第18輯)を作成している)、の三カ所である。結論としては、残念なことに、いずれでも所在不明であった。以下にそれらへの調査内容を報告する。

まず、『篁物語新講』に乙本の写真が掲載されることとなった経緯については、津本信博(1997)『篁物語』の本文」に次のようにある。今井卓爾氏が乙本全文の写真を持していたこと、今井氏からの写真と書写本との貸与により、校異が確認され、乙本の写真(一部)の掲載がなされたこと、が記されている。

○「幸いここにその全文、現状を克明に臨摸、撮影されたものを紹介させて頂く機会を得られた。それは恩師今井卓爾博士が、昭和七年十一月廿六日から数日間、彰考館文庫にて臨摸撮影されたノート及び写真である。幸いここにそのノート<sup>以下</sup>写真を拝借致し、紹介させて頂く機会を得たことは、非常なる喜びである。」「(『篁物語新講』188頁、写真はその口絵に掲載)

まず武蔵野書院にメールで問い合わせたが、ほどなく次の回答をいただいた(2020年5月7日付、改めてこの場を借りて深謝申し上げます)。その写真原稿をたどる手立てはないようであった。

○「なお、刊行年の古い書籍ですので、当時の原稿・原版等につきましては、わかる者がおりません。お答えできず、たいへん申し訳ございません。どうぞよろしくお願い申し上げます。」

ついで、故・今井卓爾氏の蔵書関係がどこかに寄贈されていないかを検索したところ、その母校の早稲田大学図書館に「今井卓爾文庫目録」（早稲田大学図書館文庫目録第18輯）があること見出した。早稲田大学図書館に、次の2点をメールで問い合わせた。①当該目録での「篁物語」「小野篁集」関係の書名の有無、その回答を受け、次いで、②当該目録所載以外に受けた他の蔵書・資料類の保管またそれらの目録の有無をうかがった。その後、2019年5月16日付で、検索調査結果も含め、次のようなご懇切な回答を頂戴できた（改めてこの場を借りて深謝申し上げます）。

○「(1)【略】最初の検索画面に戻って、「タイトル」検索をご利用いただくこともできます。試みに、こちらで指定の2タイトルを検索してみました。今井卓爾文庫内には、ヒットするものはございませんでした。

(2) 今井卓爾文庫の整理は完了しております。未整理資料等はございません。」

これで、今井卓爾氏の蔵書関係において乙本の写真や書写ノートの行方をたどる手立ては尽きた。

最後に、『篁物語新講』の著者三名に当たることとした。石原昭平氏と津本信博氏は既に鬼籍に入っておられた。残る根本敬三氏に

は面識はなかったが、氏のご自宅へ直接手紙にておうかがいすることとした。ほどなくご懇切にも拙宅へ直接お電話を頂戴した。口絵掲載の諸本の写真類は『篁物語』本文の章を担当した津本氏が担当したものであること、手元にその折の写真のコピー類でも残っていないかをわかる範囲で見てみたがもはやわからない、とご回答を頂き、また、関連するご教授を賜った（改めてこの場を借りて深謝申し上げます）。

以上、これらの探索により、現在、乙本の原文の実際の姿を伝えるものとしては、武蔵野書院『篁物語新講』掲載の口絵写真だけが、われわれが確認できる唯一の資料である、と考えざるを得ないようである。調査記録としてここに報告しておく。

### 13 京都大学文学研究科図書館所蔵本「篁物語」影印の全

#### 文【資料篇2】

さて、以上のような解釈を確認するためのひとつの資料として、京都大学本の写本を取り寄せ、そして、公開する許可を得ることとしたものである。

京都大学本は、水戸彰考館本甲本（榎型本）を「人の影写せるを借りて影写」（その奥書より）したもので、彰考館本の「忠実な写本である。」「比較的新しい伝本である。」（津本信博（1977））とされる写本である。つまり、彰考館本の直系の孫本で、「新しい」時

期のもので、「忠実」に書写したに過ぎないと目されてきた写本であった。そのため、これまで、『篁物語新講』以外で、言及されることも、まして公開されることもなかった。

今回の考察のきっかけのひとつになった写本でもあるので、京都大学文学研究科の御許可を得て〔付記1〕参照)、あえて、影印(複写)にて全文を公表する所以である。

## 14 まとめと課題

以上が、京都大学本に向き合うことになった経緯と、そこから紡ぎだすことになった考察である。その要点を簡条書きにすれば、以下のようになる。

○「篁物語」という書名で伝わる諸本は、最末尾の一文の直前におよそ二文字分ほどの空白をもつて書承されてきている。  
○その空白は、「小野篁集」という名称の『篁物語』の写本には存在していない。

○これまでの翻刻や研究では、この空白はほとんど見落とされてきている。(本文全文翻刻で再現しているもの、注記しているものは皆無。正確な翻刻は、部分翻刻の陣野英則氏のみである。)

○空白の問題を指摘し、考察を加えたものには、唯一、津本信博氏の論がある。

曰く、「原作者以外に篁ファン(ママ)や書写者などが勝手に

増補したのか、あるいは、篁物語の成立を少なくとも二段階に分けて考えるべきか、大変興味を呼ぶ余白である。多分に篁物語には、不純な本文が原作に介入していると考えられるだけの余白は充分残されていると言わねばなるまい。」

○津本信博氏の末尾空白の解釈と、安部(2019)の末尾の追加説を掛け合わせると、空白以後の一文は、全体が完成して以後(後日、後人、後代?)の追記・挿入である蓋然性が高いと推定される。

○追記の空白があるというその状態は、最後の一文の挿入者自身において、その一文が別部分であることの意識が投影し、間に二文字ほどの空白を置いた蓋然性が高い、という解釈が成り立つ。

○そのような空白を残した形態は、空白を失った形態よりも、『篁物語』という作品の、より古い段階での本文形態を留めていると解釈される。

○即ち、空白のある「末尾有空白系統本」||水戸彰考館本甲本と同乙本、京都大学本||『篁物語』は、空白のない「末尾無空白系統本」||承空本、宮内庁書陵部本||「小野篁集」よりも、古形態を留める写本である蓋然性が高い。

○また、「有空白系統本」のその形態は、「無空白系統本」の承空本が、鎌倉後期の書写であることを考慮すると、それらよりも古い段階である鎌倉中期以前の形態を保持した写本であると推定される。

○写本で書承されている書名には、「篁物語」と「小野篁集」という二種類があるが、後者の「小野篁集」は空白を失った段階以後

の書名である可能性もあり、別系統の写本であることを投影している可能性がある。

加えるに、「篁日記」は注釈書類にのみ見られる書名であつて、写本としては未だ一本もない点は改めて注意が必要であつて、写本としての名称ではない可能性もある。

『篁物語』の諸本にこのような相違と系統が確認できることになると、諸写本による新たな比較研究の必要性が高くなる。『篁物語』には、九条家本ほか所在未詳の伝本もまだ残されている可能性がある。それらの発掘ということも、今後の『篁物語』研究にとつては重要な課題のひとつになつてこよう。

## 15 追記——『河海抄』所引「篁日記」の系統

上記までのようにして「末尾有空白系統本」の形態の年代を、承空本との相対的前後関係および書体による年代推定説という間接的材料から「鎌倉中期以前」と推定したわけであつた。

その後、より直接的な証拠はないかと、再々度、研究史をめくり直してみると、『河海抄』に『篁物語』（『篁日記』）の本文の一部が引かれていることを思い出した。

その部分を照合すると、それは書陵部本系統ではなく「彰考館本」つまり「末尾有空白系統本」の本文とみなせるものであつた。

『河海抄』（のうち本文が一致している中書本）の成立は鎌倉中期とされる。さすれば、「末尾有空白系統本」の本文は、実際に現時点で最も古いことになる本文（一部）が記録されている鎌倉中期にまで遡ることが出来るということになる。『河海抄』所引の『篁物語』（『篁日記』）として引かれるが、おそらく本文は「篁物語」の本文によつて、本稿で行つた推定をさらに裏付けることが出来る、と考えられた。詳しくは別稿にて報告したい。

### 注

(1) 津本信博 (1972) 「甲本の筆者が乙本を底本に書写したのではないかと考えさせる点があり、一概に甲本のみ優位性を主張できない面があるが、」

(2) 安部 (2018c) における、末尾三文からなる回顧的終結段落に関する解釈の該当部分は次の通りである。

「8 『篁物語』の末尾段落と『伊勢物語』四十段の末尾表現  
次に、『伊勢』と共通していた末尾表現の、『篁』構想上における問題を検討しておく。『篁』の第Ⅱ部の求婚譚部分は、出世して（右大臣の）「三の君」を幸せにした、という結びで一度締めくくられ、その後に、次のような三つの文よりなる回顧的終結段落で、結びとなる。

（「い」とよくなり出でれば、この三君を、また二つなくもてかしづき奉る。」の後に）

（第1文） 今の人、まさに大学のせうを、むこに取る大臣もあらむや。

（第2文） たゞ、心・かたち・才おとり【通釈】才を取り】給な



るべし。

(第3文) 又、あらじかし、かやうに思ひて、文作る人は。

従来、いかにも取って付けたかのようなこの、大学の学生称揚表現、博士・学生の才や漢学への評価、新旧時代の対比表現、古き良き時代を回顧する表現に対しては、後代における加筆の可能性、さらに、平安後期の時代的背景を投射した視点からの回顧、中世的訓戒的感慨などのような受け取り方もなされてきた。また、成立年代を平安後期以降に下げる材料の一つとして挙げられる箇所でもあった。

この三つの文のうち、後藤氏の考察により、第1文の表現は、『伊勢』を踏まえたものである蓋然性が高いことが明らかになった。もしそうであれば、末尾の回顧的表現のうち、「今の人、まさに大学のせうを、むこに取る大臣もあらむや。」は、第一部・第二部の(初期構想部分も含めた)主要段落の構成が固まった段階には、既に組み込まれていた表現であったことになる。

残る解釈上の課題は、右の結語段落の第2文、第3文の位置付けということに絞られる。さらに、『伊勢』の「今・昔対比」末尾のうち「昔の若人」に対応するのが『篁』の「昔の大臣」たゞ心・かたち・才を取り給ふなるべし。』であったと見た場合には、そこまでが『伊勢』との対応範囲ということになり、残るのは最後の一文のみとなる。

すなわち、いずれにせよ、後代に末尾部分に加筆があったとしても、それは、かなり限定されたものであったのではないか、ということも新たに覚えてきた視点である。」以上。

【補注】京都大学本の書写年代は不明であるが、奥書にある「影写」はそう古い語ではない。調べた範囲では現在『甲子夜話』『慊堂日曆』での例が古く見られるので、それを拠るところとすれば、およそ19世紀

初め以降の影写ということか。

### 【参考文献】

「執筆者未詳」(1933)「校本篁物語(彰考館甲本)」「文学」創刊号(1-

1)、「附録」

安部清哉(1996:3)「語彙・語法史から見る資料——『篁物語』の成立時期をめぐって——」『国語学』184

石原昭平・根本敬三・津本信博(1977)『篁物語新講』、昭和52、武蔵野書院

津本信博(1977)『篁物語』の本文、『篁物語新講』、昭和52、武蔵野書院  
津本信博(1977)『篁物語』の成立をめぐって、『篁物語新講』、昭和52、

武蔵野書院

平林文雄・財団法人水府明德会編著(2001)『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字分析・総索引』、平成13、和泉書院

安部清哉(2009:3)『篁物語』承空本(小野篁集)に関する研究課題「人文」7

安部清哉(2010:1)『篁物語』の井野葉子氏「源氏物語」浮舟巻での引用」説補強ならびに祖形小考』『古典語研究の焦点——武蔵野書院創

立90周年記念論集』、平成22、武蔵野書院

安部清哉(2014)『篁物語』佐藤・前田編『日本語大事典』、平成26、朝倉書店(項目執筆)

陣野英則(2017)『篁物語』の構成と言葉』『国文学研究』133

安部清哉(2017:3)「原『篁物語』の作者・成立年と源順および河原院歌壇沈淪歌人群の長歌・和歌——九六一年から九八〇年頃か——」『学

習院大学文学部研究年報』63

安部清哉(2018:3)『伊勢物語』三十九・四十・四十一段と源順——『篁

物語』第一部・第二部共通の二典拠章段として——」『人文』16

安部清哉 (2018.5) 「挿入段落・附載説話という視点から見た『篁物語』の構成と形成——残る断続場面の「ふみ(書||漢字)」という主題——」『学習院大学教職課程年報』4

安部清哉 (2018.6) 「係り助詞(ナム・ソ・コン)の四文体別変遷史から見た『篁物語』——源順原作説とも照らしつつ——」『国語と国文学』95-6

安部清哉 (2019.3) 「呼称から見た『篁物語』の段落構成——『せうと(冗)』『男』の相補分布——」『人文』17

安部清哉 (2019.3) 「贈答歌と会話と段落構成から見た『篁物語』とくくり歌物語」の創出」『文学部研究年報』65

【付記1 謝辞】 本稿掲載の京都大学文学研究科図書館所蔵本『篁物語』については、京都大学文学研究科「京都大学文学研究科長・南川高志」名により、令和元年6月14日付け文書「No.京大文図掲7号」の「特別利用許可書」により「全頁」の掲載の許可を賜ることができた。明記してここに研究成果を報告し、深謝申し上げる次第です。

○許可資料名：篁物語(国文：二m2b) 全頁  
 (津本信博(1977)によれば、旧所蔵番号は「旧・図書番号529038」  
 である。)

【付記2 謝辞】 武蔵野書院には、『篁物語新講』口絵の写真の転載を御許可賜った。心より感謝申し上げます。

【付記3】 本稿は次の研究費による研究成果の一部である。日本学術振興会科学研究費2017-2019年度基盤研究C(基金)(課題番号：17K02785) 代表：安部清哉

ENGLISH SUMMARY

Study of the Kyoto University's Trans-manuscript of the "Tale of Takamura" (『篁物語』): The Significance and Historical Interpretation of the Blank Space before the Last Sentence

ABE Seiya

This paper will examine the historical relation between two types of transcripts of the "Tale of Takamura" (『篁物語』), called "Takamura-monogatari" (『篁物語』) = "Takamura-monogatari" and "Onono-Takamura-shu" (『小野篁集』).

"Kyoto University-bon" (『京都大学本』) is a trans-manuscript of the "Tale of Takamura" transcribed by "Shoukoukan-bon" (『影考館本』) and entitled "Takamura-monogatari" (『篁物語』). "Kyoto Univ.-bon" and "Shoukoukan-bon" have a blank space before the last sentence.

"Shouku-bon" (『承空本』) is trans-manuscript of the "Tale of Takamura," transcribed by Shouku in the Kamakura era and entitled "Onono-Takamura-shu" (『小野篁集』). "Shoryoubon-bon" (『書陵部本』), another transcript of the "Onono-Takamura-shu," is a trans-manuscript of "Shouku-bon." "Shouku-bon" and "Shoryoubon-bon" do not have a blank space before the last sentence.

As a result of consideration about the blank after original this work is completed, it can be interpreted as a blank space that is generated when a sentence after this blank is inserted.

The result of a comparison between "Shoukoukan-bon" = "Kyoto Univ.-bon" = type and "Shouku-bon" = "Shoryoubon-bon" = type, it is clear that "Shoukoukan-bon" = "Kyoto Univ.-bon" = type is older than the other transcripts and is a manuscript that more closely resembles the original the "Tale of Takamura." Therefore, it is necessary to consider the original script and the historical relation between two types transcripts of the "Tale of Takamura."

*Key Words:* "Tale of Takamura" (『篁物語』), the Kyoto University's Trans-manuscript, "Onono-Takamura-shuu", reprint, a original

\*\*\*\*\*

**【資料篇】**

**【資料篇 1】 諸本文および諸注釈書での翻刻など**

末尾の空欄部分に関わる写本や研究書などの次の資料を提示する。

○ 伝本諸本の写真・影印

- (1) 末尾有空白本系統 「篁物語」系本
  - 1 「篁物語」乙本 (今井卓爾氏撮影) 写真 (『篁物語新講』、武蔵野書院)
  - 2 「篁物語」京都大学文学研究科図書館所蔵本

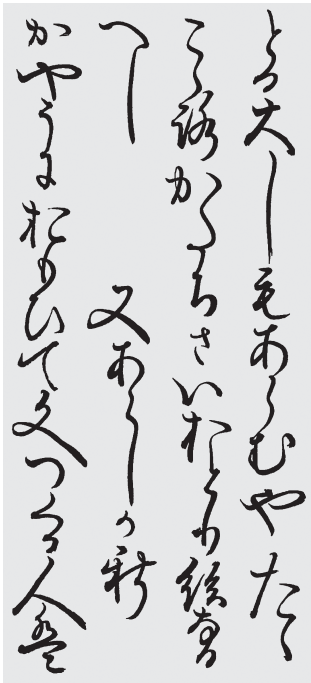
(2) 末尾無空白本系統 「小野篁集」系本

- 1 「小野篁集」京都大学文学研究科図書館所蔵本末尾・奥書

(3) 諸本の活字翻刻 (顕彰考館本の翻刻)

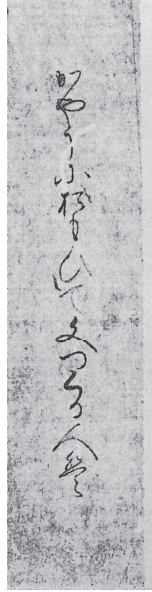
- 1 平林文雄・他 (二〇〇一)
  - 1-1 ① 平林氏「三本並列対校本」
  - 1-2 ② 平林氏『篁物語』甲乙両本対照仮名字母本文」
- 2 陣野英則 (二〇一七)

**【資料篇 2】 京都大学文学研究科図書館所蔵本「篁物語」(影印全文)**

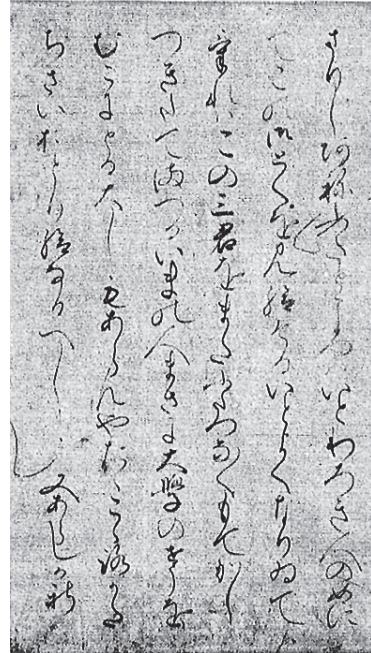


(1)–2 「篁物語」 京都大学本

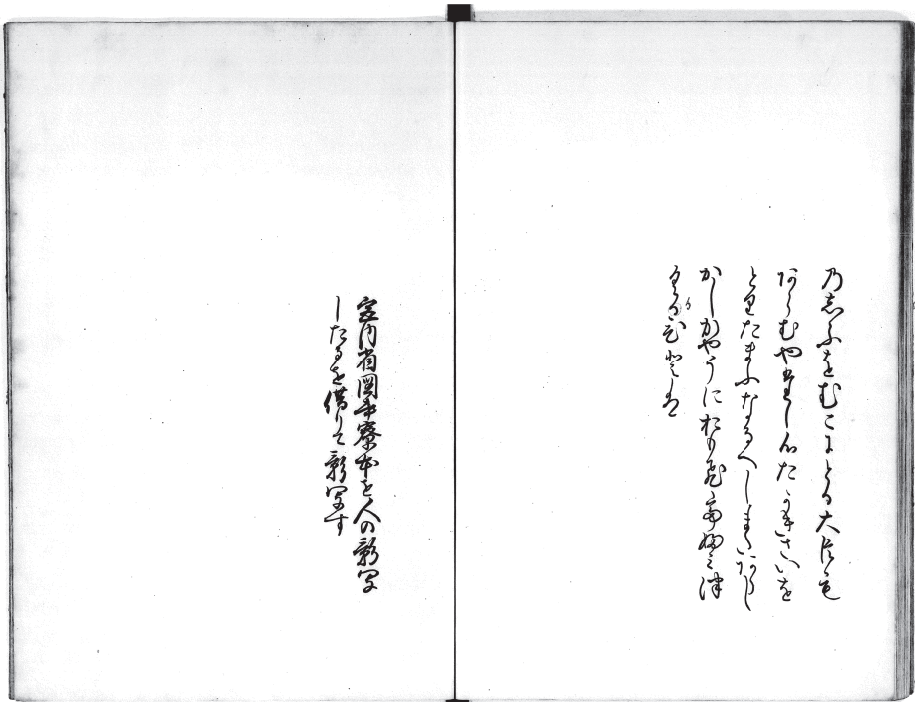
影考館本（乙本）篁物語



影考館本（乙本）篁物語【末尾】



(1)–1 「篁物語」 乙本  
 (今井卓爾氏撮影) 写真 (『篁物語新講』 武威野書院)



(2)–1 「小野篁集」 京都大学文学研究科図書館所蔵本 末尾・奥書

|                                 |                           |  |
|---------------------------------|---------------------------|--|
| (3) 1 ① 平林他 (二〇〇一)<br>『三本並列対校本』 | 三本 (小野篁集) 並列対校本<br>(篁物語乙) | のしふうをむこにとる大臣も<br>せうせう<br>あらむやたゝ心・ろかたち<br>給・ん 給・ん ころかたち<br>とりたまふなるへし 又・またあらし<br>給・ん 給・ん 又・またあらし<br>かしかやうにおもひてふみつ 文・文<br>くるひと 人・人<br>5 4 3 2 1 |
|---------------------------------|---------------------------|--|

平林他 (2001) 『三本並列対校本』

|  |                             |   |
|--|-----------------------------|---|
| (3) 1 ② 平林他 (二〇〇一)<br>『篁物語』甲乙両本対照仮名字母本文』 | (3) 2 陣野英則 (二〇一七) 彰考館本翻字と校異 | 4 加也宇尔於毛比天文川久留人盤<br>かやうにおもひて文つくる人は<br>加也宇尔於毛比天文川久留人盤<br>3 部之 又安良之可新<br>へし 又あらしかし<br>部之 又安良之可新<br>2 己、路可多知左以於止利給奈留<br>ころかたちさいおとり給なる<br>己、路可多知左以於止利給奈留<br>1 己、路加多知左以於止利給奈留<br>ころかたちさいおとり給なる |
|--|-----------------------------|---|

平林他 (2001) 『『篁物語』甲乙  
両本対照仮名字母本文』

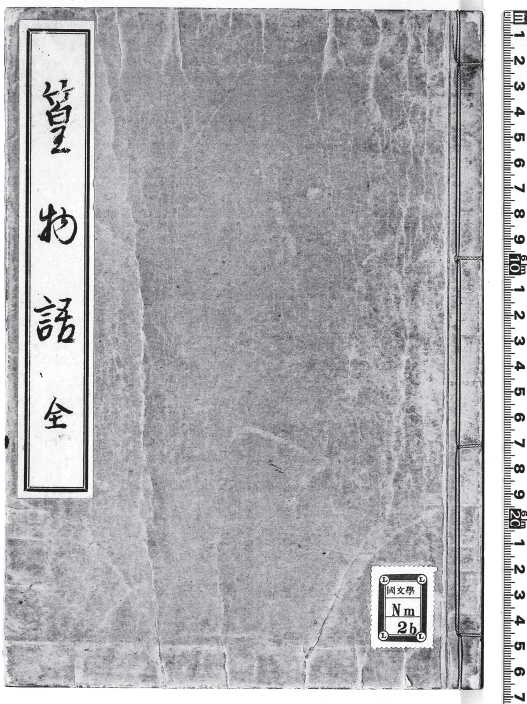
る。今の人、まさに大学のせうを婿にとる大臣もあらむや。  
 「右大臣ハ」ただ心、かたち、才をとり給ふなるべし。 又\*  
 あらじかし、かやうに思ひて文つくる人は。(二五〇―二六ウ)  
 \*さらにも―さうにも(彰)―サラニモ(承)  
 \*うたつくる―山たつる(彰)―ウタツクル(承)  
 \*子、孫どもにて―こんまうの、こて(彰)―コムコノ、コテ(承)  
 (意改)

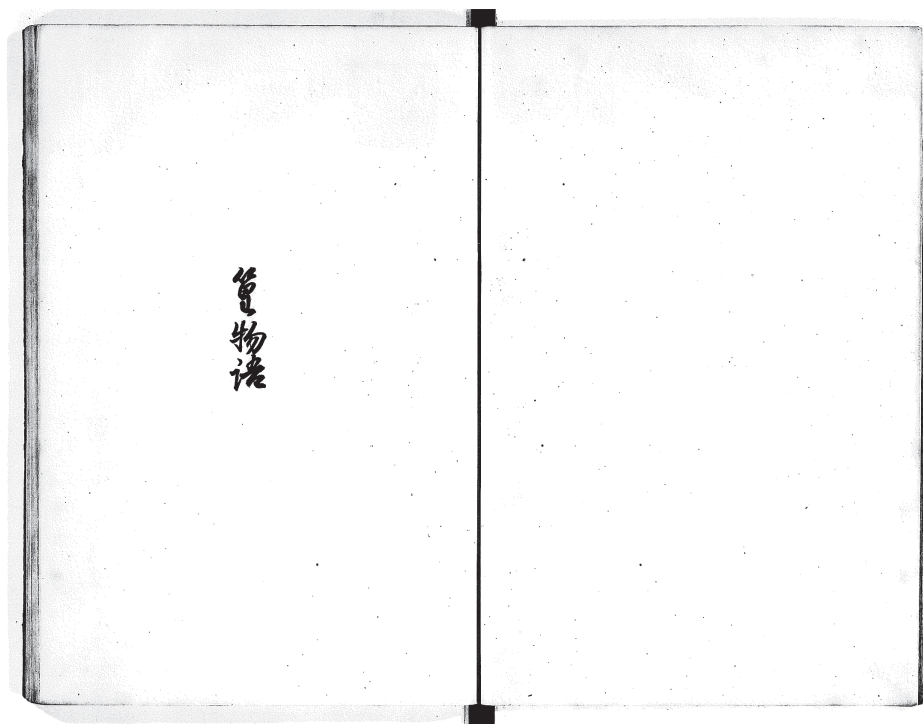
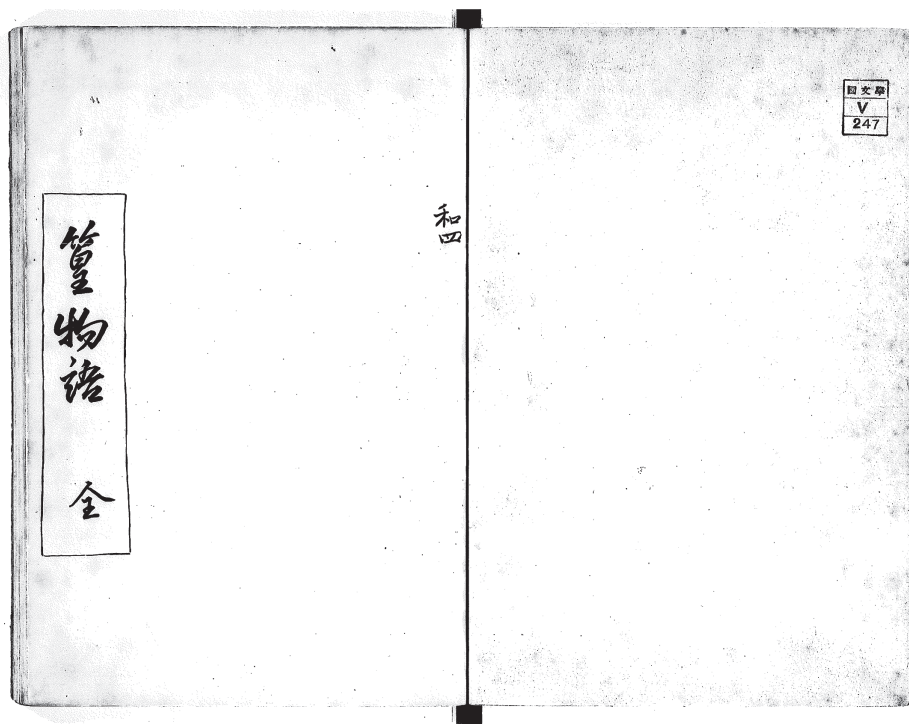
(3) 2 陣野英則 (2017)

【資料篇 2】

京都大学文学研究科図書館所蔵本

『篁物語』 (影印 全文)





529030  
00A-2.23



ねやのいとくが けきを人の  
むきめあはれを女れをまうこのか  
まわつていぬがやなほ  
なんそけ勢いむつてい  
人をまんとそとけのこれ大  
勢ろーうそあやまわと  
なわなれうそあひみすか  
とあはれとぬ人たわて  
すつれーエハ張つていぬ

さつろこのおとこいとお  
まをそとすつていぬ  
かみはみ物徳うそとて文の  
さあといもの徳うそをわけ  
をこれいひちて一首を  
あんかたをわきま  
なつていぬ  
あ勢をんいし勢の心を  
こゑていぬ

とあはれにかあまうとて  
つていぬ  
わき  
いし勢いうそをたふみそあ  
かみぬていぬ  
にこれをおまふ  
あおとこ  
まこつていぬ  
こつていぬ



たのえとていぬ  
 をんか  
 あり勢をいづりて  
 わつむとて勢をいづりて  
 人のいづりて  
 ねとこ  
 見のまじむあり勢をいづりて  
 いもさうなかりたりわい  
 ころりのころりて

かくし程は人まくとてぬよ  
 あれいとてさうせとてわ  
 なわーのすのころりて  
 ありまは物徳とて人をいづりて  
 せれつわむまきとて  
 月長もいづりていづりて  
 春をまつ冬のかきしわ  
 おまよいづりて月  
 われなかり

か  
 ころりてたよとて  
 この月みづのひとや  
 あれとてむけい  
 かくし程は人まくとてぬよ  
 ありまは物徳とて人をいづりて  
 せれつわむまきとて  
 月長もいづりていづりて  
 春をまつ冬のかきしわ  
 おまよいづりて月  
 われなかり

か  
 ころりてたよとて  
 この月みづのひとや  
 あれとてむけい  
 かくし程は人まくとてぬよ  
 ありまは物徳とて人をいづりて  
 せれつわむまきとて  
 月長もいづりていづりて  
 春をまつ冬のかきしわ  
 おまよいづりて月  
 われなかり



けいさう程も無刺すまわ  
 の人さそらきしけそと  
 女らりなわらう返してあひ  
 てうはよ女みりあうあか  
 くらうてやあそらう  
 能つその秘みしてねこ  
 けよわい車つりてこの  
 るわらう木さきの屏す  
 をそまうらん女の方より大

みよふれをう返さういふ  
 何とよくれわまわいあまこ  
 してくお勢んとすうよこの  
 寸量紙やままくほこのねこ  
 やまじやうわてねまこく

人しれねと返さうすの  
 神さうはなまふと返さ  
 うまふしと返さ  
 かうし

やう返さうあふれ秘す最  
 不神をうまか  
 人のう返さ  
 返さうと勢なれとこのまう  
 とどうかしてくま返のせく  
 井くいねこのすま人返さ  
 ていつをうまわくいねとみせ  
 言れらうのい点とそまわら  
 言よあえあね神のをう返

うまわらうてたま  
 ぶかの不神此れまとはせま  
 あまあえ返さうわらくこれ  
 このまうといてうまわら  
 ねま返さうまのま  
 うこのわらうて  
 きつたにいつまのすまの  
 返さうとひなれはあま  
 してまうてつれまのの

ぞねーのいれのついで  
 の後をうらうらたまたま  
 一息にうらなうらなうらな  
 つれいさつりーいさつりー  
 てきわくつひきまれのうら  
 わらやといをうらうら  
 は眺のほほしいいねね  
 つらきこのうらなうらな  
 あつてうらなうらな

あとけもなかくあつて  
 はまらうとわねほつら  
 はいぐとつら  
 この勢うと大かくいさつり  
 そちひさつりーいさつり  
 てきまらつらうらなうら  
 大くのうらなうらなうら  
 からん人のうらなうらな  
 うらなうらなうらな

を返すこのみち井井  
 若されいあはは若さかく  
 なるとーいさつり  
 えてされり(は)いさつり  
 て返りくーいさつり  
 いさつり返りーなりうらな  
 の子なわうらなうらな  
 ねらみちよこさつり  
 ーはくふあうらな

いさつりうらなうらな  
 ましとあひさん  
 返たこれれいのわらうら  
 きつわさうと見返はうら  
 ていさつりこれわらうら  
 かわかうらうらうら  
 きつわさうと見返はうら  
 きつわさうと見返はうら  
 きつわさうと見返はうら

海幸ひもの—言ふたつち  
 —ものやた—いもの  
 うやうもくはをりてや  
 ほうりにく—とわすものや  
 うみきうとくあひてあみ  
 くてまの給人のあつたこ  
 一あなまれ—い—い  
 りゆくは—このい  
 つんも—すうらいてい

けといひまれ—い—い  
 こつては—い—い  
 あんとわひて—い—い  
 うすなわおきも女きうとの  
 けわたる—い—い  
 うををつれわとふむわこのと  
 うとれい—い—い  
 ひの—い—い  
 あん—い—い

人の心—い—い  
 のは—い—い  
 て—い—い  
 めゆ—い—い  
 る—い—い  
 うつ—い—い  
 か—い—い  
 ん—い—い  
 あ—い—い

こ—い—い  
 い—い—い  
 り—い—い  
 毛—い—い  
 言—い—い  
 な—い—い  
 あ—い—い  
 が—い—い  
 の—い—い

いそれをわたとていよやうかく  
 ねむいといれかまわさずとて  
 を忘るしすしとていよやうかく  
 をねむいといれかまわさずとて  
 めいちちくみくもいよやうかく  
 ねむいといれかまわさずとて  
 やういといれかまわさずとて  
 とていれかまわさずとて  
 ます

われとていよやうかく  
 ねむいといれかまわさずとて  
 を忘るしすしとていよやうかく  
 をねむいといれかまわさずとて  
 めいちちくみくもいよやうかく  
 ねむいといれかまわさずとて  
 やういといれかまわさずとて  
 とていれかまわさずとて  
 ます

ねむいといれかまわさずとて  
 を忘るしすしとていよやうかく  
 をねむいといれかまわさずとて  
 めいちちくみくもいよやうかく  
 ねむいといれかまわさずとて  
 やういといれかまわさずとて  
 とていれかまわさずとて  
 ます

ねむいといれかまわさずとて  
 を忘るしすしとていよやうかく  
 をねむいといれかまわさずとて  
 めいちちくみくもいよやうかく  
 ねむいといれかまわさずとて  
 やういといれかまわさずとて  
 とていれかまわさずとて  
 ます



あつたはさきりいそつたのこ  
ゆたな可あはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの

うたひをほとおはあけぬ  
へーたそ  
あつたはさきりいそつたのこ  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの

あつたはさきりいそつたのこ  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの

あつたはさきりいそつたのこ  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの  
あかいさあはまここれららの





といふ程「表」のあきうたれい  
 まし「花」のすくいなれぬ  
 とかくおはしひはきこの  
 さうとう——けつ人がみま  
 二あゆみおなれつぎこのさび  
 すすまひんくくまう一人て  
 この女城——にきくやをい  
 よくこいひはかまうい  
 と綴り前まをとりて升

いれこのいし——あまんが  
 きてくくしきうこ七日いと  
 あまやつかり七七日のい  
 々々このわとぬつきき  
 なくうのぬをすしもの  
 しくは華をかまういこの  
 三味堂とく七日のわとく  
 うのい——い  
 めく——きえまわりなり三年

すうていゆんふしを  
 人きまわたりをう  
 々れい——ぬれく——さん  
 函をせりきうぬふし  
 ひとわんあまを時のたふ  
 のむすぬふしとふみ  
 ち——あつかりてうら  
 里路とる活車ふりや  
 とく——い——かまうい

うまどわりて見し  
 結いりぬ今ふりかりて  
 きこ真んとの結大  
 々々とのふかりて  
 たり——たり大  
 さんあつふときこ  
 一——てかまうい  
 か——い——かまうい

こころをうらみしつゝあつちの縁に  
 いふはなはさきうらむもあつちの縁に  
 ちよと申すていひ縁にせしうら  
 むあつちの縁にうらむもあつちの縁に  
 のやせこころなまきそと  
 井つちくつちもなまきそと  
 文のちよと申すていひ縁にせしうら  
 うのちよと申すていひ縁にせしうら  
 ぎをうらむもあつちの縁に

たつちをうらむもあつちの縁に  
 うらむもあつちの縁に  
 縁にうらむもあつちの縁に  
 をうらむもあつちの縁に  
 ひくもあつちの縁に  
 こころをうらむもあつちの縁に  
 人なまきそと  
 かこころをうらむもあつちの縁に  
 うらむもあつちの縁に

両り縁にうらむもあつちの縁に  
 縁にうらむもあつちの縁に  
 のあつちの縁にうらむもあつちの縁に  
 うらむもあつちの縁に  
 見一人はうらむもあつちの縁に  
 何つちよと申すていひ縁にせしうら  
 ねいひもあつちの縁に  
 うらむもあつちの縁に  
 てうらむもあつちの縁に

こころをうらむもあつちの縁に  
 たつちをうらむもあつちの縁に  
 うらむもあつちの縁に  
 まへてうらむもあつちの縁に  
 こころをうらむもあつちの縁に  
 あつちの縁にうらむもあつちの縁に  
 こころをうらむもあつちの縁に  
 さめわいてうらむもあつちの縁に  
 こころをうらむもあつちの縁に

はらうと一蹴してとわすれ  
 く一踏ふはつ人をけんま  
 ひきんていひてみま  
 まうよ世いあらん  
 わりてすまきま  
 とき一針ふきまを  
 みせまらん  
 あかろつとの後ま  
 なろつたはせかく

てはていそ一踏め  
 踏ふ一あつあつ  
 一踏まは(なり後  
 けぬそ  
 わらまをのつあ  
 かりぬむ打つは後  
 あつそ  
 いはつをひき  
 せけはははは

まふらうかといひま  
 このわつわつまひ  
 いと後んあつを  
 後つなと一せり  
 いて宰相よりかみ  
 なるこれんか  
 むつと音つかく  
 まふらす山つ  
 つかは此の國人よ

うあつこのあん  
 こつとよねなり  
 かりきたまを  
 後つとついとわ  
 のあつこれとく  
 いとつありて  
 三をまつ  
 かつを  
 まはつ

